

環境文明社会づくり あれこれ (57)

源流 (57)

当会が発足した 33 年前の NGO 像は、“反政府、反企業”を装うのが一般的。しかし私達は、文明社会を転換する必要があると主張している以上、社会の一大セクターである企業社会に直接働きかけるのは当然と思い、まず縁のあったいくつかの大企業の環境部局とお付き合いをした。一方、コノエさんは、市民相手の環境学習を精力的に実施していたが、中小企業の多忙な経営者に学習してもらうのはどうしたらよいかが課題で、十数人の会員と一緒に知恵を絞った結果出てきたのが、経営者「環境力」大賞事業である。

この賞のミソは、「情報を公開し、公正な経営に率先して取り組む勇気」「事業を大きくしすぎない勇気」など 12 項目を挙げ、経営者自身に自己評価してもらう点である。直接面談し、会社の事業内容などの資料をもとに審査する。2008 年から昨年度まで 18 回を数え、大賞 103 名、奨励賞 10 名、計 113 名が受賞している。受賞経営者がどのように「環境力」を発揮したかや、各人の受賞理由については、会報で詳しく報じている通りだ

が、要約すれば、“環境力”とは企業経営の総合力”ということだ。そのことは「経営者『環境力』大賞」事業で知り合った経営者の姿勢から、私たちは深く実感している。

数ある受賞者や関係者の中から、特につなぐの深い 5 人のプロフィールを簡単に紹介したい。第 1 回受賞者の田中正敏氏は、当時、一部の悪質産廃業者による不法投棄が頻発していたこと等を背景に、世間のこの業界全般に対する理解と評価が不当に低かったのに強く反発。廃油を回収・精製して燃料油としてセメントや鉄鋼業界に販売する主力事業を中心に、97 年の日本海でのナホトカ号重油流出事故の際にはいち早く現場に駆けつけ海岸清掃に取組み、また当時、業界最初の環境レポートを発刊して社業を包み隠さず公表。さらに有望な若手社員を募って「未来塾」で研修させるなど、今日の「資源循環、脱炭素、サーキュラーエコノミーへの投資」を時代に先立って実行。その結果、業界の地位向上と社業の発展・拡充に繋がった（社名も段階に応じて「近畿環境興産」→「リマテック H」→「レックス H」に変更）。なお、第 18 回大賞受賞者の田

加藤 三郎

中靖訓社長は正敏氏のご長男。

同じく第 1 回の受賞者に、高橋房雄 高特社長がいる。群馬県渋川市に拠点を置き、主な社業は土砂崩れ防止や美観保全などの斜面・路面緑化。最初に知り合ったのは、高橋氏が王子製紙主宰の日本環境土木工業会の理事長の時で、人柄は真面目で誠実そのもの。若い時に美術家志望であったが、家業を継ぐことになっても、建設業の仕事の合間に木版画を作成し、毎年春の「春陽展」の常連であった。私とコノエさんは毎年招待されたが、特長ある抽象的な作風で、会場に入ると、数ある作品の中でも一目で高橋作と見分けられるものだった。中小土建業のリーダーでありながら、春陽展では“画界の芥川賞”ともいわれる岡鹿之助賞を受賞している。2015 年に「経営者『環境力』クラブ」の初代会長に就任したが、惜しくも 2020 年 6 月に亡くなられ、社業は娘婿の設楽雅之氏が立派に継承。なお同じく法面緑化を主業とする上毛緑産工業の高橋範行氏は房雄氏の甥で、10 年前に本大賞を受賞。（この項、続く）

